



Title	TA (Teaching Assistant) の声 サイバーメディア フォーラム no.18 CALLシステム
Author(s)	
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2018, 18, p. 38-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70433
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

CALL 授業の TA として学んだこと

黄 俊 （言語文化研究科 言語文化専攻）

1. はじめに

私は 2017 年度前期、地域言語文化演習（ドイツ語）の TA を担当しました。受講生はドイツ語専門の学生ではありませんが、ドイツ語を身につけるために、一生懸命勉強する様子が見られたと思います。

2. 学生を通して

例えば、授業がまだ始まらないとき、CALL 教室に入ると、学生たちがドイツ語を朗読する声が聞こえました。この四ヶ月間、遅刻する学生があまりいなくて、授業開始の 5 分前に教室に入ると、半分以上の学生がすでに席に着いていて、WebOCMnext を開け、先週の内容を復習し始めていました。それだけではなく、教室を回っているとき、Web 教材を学習しながら、ノートでメモをしている学生をよく見かけました。これらのことにより、私は学生の学習意欲を感じ取りました。

3. 言語学習支援システム WebOCMnext について

CALL 教室で WebOCMnext の利用を通して、学生たちが意欲的に授業に取り組む姿が多く見られました。

授業の最初から、先生は「新世界」という掲示板に本日の課題を投稿し、学生に知らせます。学生は先生の指示に従って、Web 教材を利用し、勉強し始めます。

授業のほとんどが練習問題と小テストが設置されていますので、先生は受講生が本当に当日の内容をマスターしたかどうかわかります。また、授業の最後、学生に自分が学んだことと感想を「新世界」に記入してもらって、その内容により、先生が事前に次の授業内容を調整することができます。この点が、このシステムを使う最大のメリットだと思います。一般の

授業では、疑問を抱いても、授業内で先生に聞く勇気が持てない学生が少なくないと思いますが、「新世界」に自分の感想や疑問を投稿すれば、直接先生と話さなくても、言いたいことを伝えることができます。

さらに、WebOCMnext が各学生の出席状況を記録しています。一人一人の名を呼ばなくても、出席状況が確認できます。システムが学生の出席状況を間違ったとしても、記録を変えるのは可能です。すごく便利な機能だと思います。

4. 学生を通して

CALL 教室だけではなく、コンピューターを使い、ネットがつながれば、いつでもどこでも WebOCMnext システムに入ることができ、復習することができます。私はお手伝いさせていただいた授業を通して、WebOCMnext システムの便利さを実感しました。

TA としての経験談

李 潤澤（言語文化研究科 言語文化専攻）

はじめに

本年4月から水曜日4限目の地域言語文化演習（ドイツ語）の TA を担当させていただいています。大学院生活を充実させていただいていると同時に、大学教員を目指している私にとっては、教育経験をつむ貴重な機会です。以下にご報告いたします。

先生の助手として

4 月の本格的な授業が始まる前に、先生たちから親切なご指導をいただきました。授業前の準備、授業中に学生がトラブルでアドバイスを求めてきた時の対応方法、授業の後の事務連絡まで、細々と教えていただきました。ノートを取りながら、先生の助手として責任が重い TA 生活がいよいよ始まると実感しました。

担当している授業は、WebOCMnext というオンライン言語教育システムを使っている基礎工学部の学生向けのドイツ語授業です。文系の学生である私は、パソコンの知識も豊富でないうえに、ドイツ語も全然勉強したことがなくて、最初はまったく自信がなかったです。自分の能力は担当している授業にとって不足していると感じていました。しかし、3 回目の授業での出来事は私の心理状態を変えました。

担当の先生は、TA の私たちに授業の練習テストの時に教室を回って試験監督をする任務を与えました。それまでの2回は、いつも授業の始めにマイクを準備するなどの基礎的な仕事や、授業で学生にパソコンの問題がある時対応するなど受動的な仕事をしていただけでした。3 回目の授業で試験監督の任務を与えられた時、能動的に先生の分身として、教室を回り始めました。簡単そうに見える任務ですが、教育について大いに考えさせられました。

それは、私が教室を回る時、学生たちの様子を普段とは別の角度から見られたことで、学生のなかに能動的に入り込むことの重要性を感じました。学生

は普段、個人の性格によっては、質問があっても、恥ずかしくてアドバイスをもらわないままの場合が多いのですが、私は試験監督として回っている時、学生たちの後ろ姿から、どこで困っているとか、どこがよく理解できているとか、全体的に捉えられました。つまり、学生の質問を待たずに、能動的に学生の状況を把握することができたのです。このことは教育に積極的な意義を持っていると自覚しました。

ごく些細なことではありますが、自分の経験から得たことは、もし自分が将来教員として働く時には、もっとも生き生きした記憶として蘇ると思います。

学生の先輩として

TA のもう一つの側面は学生たちの親しみやすい先輩です。このアイデンティティにおいても、私は当初の予想以上に有益な経験をすることができました。

授業では「新世界」という教育用のオンライン・コミュニケーションエリアが活用されています。主に先生と学生たちの授業内容についての質疑応答のツールですが、私が TA として返信することもできます。授業のとき困っている学生がいれば、私ができる部分は答えたりしました。

また TA として経験したのは授業内容に限らず、放課後でも次のような出来事がありました。そのクラスに一人の中国人留学生在いました。ある日の授業で、彼は私に授業の内容について質問し、私は先生に報告しました。授業が終わって、私が普段通りに作業をした後、教室から出ようとする、彼が教室の出口で私を待っていました。私が中国人であることを知った彼は、一回生の留学生として阪大生活にまだまだ慣れていないところがあって、私に留学生生活で困ったことを聞いてきました。時間的に早く

日本に来た留学生としての立場で、彼に幾つか必要なアドバイスをしました。「あげる方がもらう方より幸せ」という気持ちを味わうことができました。

まとめ：アシスタントというよりパートナー

TA は teaching assistant の略称で、教育のアシスタントの意味です。

しかし、私の経験から TA の二つの側面について以上に述べたように、先生の助手は、ある時には先生の分身として授業をうまく進めることができるように働いています。また、学生との関わりから見ると、TA は同じ経験をより先にした友達に近いです。いずれにしても、アシスタントというよりパートナーに近いです。

これは、教育者を目指している私にとって、TA の経験を通して学んだもっとも印象深いことです。もし、今後自分が教壇に立ったら、TA としての心構えを忘れず、能動的に学生の仲間になって、TA がいない授業でも TA がいるような雰囲気を作って、和やかに勉強が進められるように工夫したいと思います。